

## P-3 ベンガル語の [主格主語 分詞 GO/FALL] 構文: 逆使役としての分析\*

石川さくら (東京外国語大学大学院) sakura.ishikawa.di2@gmail.com

**要旨** ベンガル語には主格主語と他動詞の分詞、主動詞 (*ja* ‘go’または *por* ‘fall’) から成る言語表現 ([主格主語 分詞 GO/FALL] 構文) がある。この構文はベンガル語において受身を表す一つの方策であると考えられてきた。本発表は、本構文の意味的および統語的な振る舞いを記述した上で、本構文は受身ではなく逆使役であることを示す。特に、意味的および統語的に動作主が事象から削除されるという点で受身構文と相違点を持つと主張する。そして、本発表は、これまで逆使役があまり報告されてこなかった南アジアの言語に逆使役構文が存在することを提示するとともに、ベンガル語における統語的な形式による逆使役構文を示すことで、言語類型論における逆使役構文の多様性を示唆するデータを提供する。

### 1. はじめに

Masica (1976) は複数の観点から言語連合として南アジアを特徴づけたが、使役動詞の存在もその観点の一つとして取り上げている。ベンガル語を含む南アジアの言語では使役化が中心的であり、逆使役化は一部の地理的境界の言語を除き、あまり観察されないとされる。実際、南アジア言語において逆使役化に関する報告は限定的である。ベンガル語もその例外ではなく、これまで非使役化の方策といえば専ら受身構文が文法記述における中心だった。本稿はベンガル語の [主格主語 分詞 GO/FALL] 構文に着目し、その記述を通して、ベンガル語に逆使役が存在することを示す。

本発表が着目するベンガル語は、インド・ヨーロッパ語族インド・イラン語派現代インド・アーリヤ語派に属し、主にバングラデシュやインド東部で用いられている。このベンガル語には主格主語と分詞、主動詞 (*ja* ‘go’または *por* ‘fall’) から成る言語表現がある。本発表は、これを [主格主語 分詞 GO/FALL] 構文と呼ぶ。(1) では *dhak* ‘cover’の分詞と *por* ‘fall’ から成る述部で「隠れる、覆われる」が表される。

(1) *furjo megh-er pichon-e dhak-a por-ech-e*  
sun cloud-GEN back-LOC cover-PTCP fall-PRF-3

「太陽が雲の後ろに隠れた」

(Thompson 2010: 387)

この構文はベンガル語文法において受身構文 (Chatterji 1926; Seely 2011; Bhattacharya 2006)、あるいは受身の意味を持つ複合語 (Thompson 2010, 2012) などと分析されてきた。つまり、受身を表す一つの方策であると考えられてきた。

しかしながら、必ずしもこの構文が受身の機能を持っているとは見なせない。以下の (2) の例では、他動詞 *mar* ‘kill, hit’ の分詞が用いられてはいるものの、「殺す」動作主は項として現れていない。主語には被動作主が生起して、意味としては殺されたのではなく自然と死んだことが表される。

(2) *tar bap du bochor age mar-a ga-l-en*  
3.SG.GEN father two year ago kill-PTCP go-PST-HON

「彼の父親は二年前に亡くなった」

(Thompson 2010: 389)

\* 本稿の作成にあたって、以下の方々から有益なコメントをいただいた：佐近優太、佐々木充文、鈴木唯、谷川みずき、中本舜、長屋尚典、林真衣、Parthasarathi Bhaumik、萬宮健策、宮川創、諸隈夕子、山本恭裕、吉田樹生 (敬称略、五十音順)。各氏に深く感謝を述べたい。言うまでもなく本稿に残るいかなる誤りも発表者の責任である。また、本研究は JST 科学技術イノベーション創出に向けた大学フェローシップ創設事業 JPMJFS2110 の助成を受けたものである。

したがって、この構文を受身の一つとして扱うことが妥当なのか疑問が生じる。この構文は受身の意味を表すと述べられると同時に、生産性が限定された固定的な表現であると見なされている (Chatterji 1926: 921; Bhattacharya 2006: 3)。そのため、これまでは Thompson (2010, 2012) のように分詞と主動詞の可能な組み合わせをいくつか挙げるに留まっており、この構文の意味や振る舞いについて詳しい記述はなされていない。

これらの指摘を踏まえて、本発表は [主格主語 分詞 GO/FALL] 構文の意味や振る舞いを記述し、当該構文を複雑述語として見なした上で、受身ではなく逆使役であることを示す。

本発表の構成は以下の通りである。第2節で [主格主語 分詞 GO/FALL] 構文と BECOME 受身構文の概要を示す。第3節で事象における動作主の有無という点で [主格主語 分詞 GO/FALL] 構文は受身ではなく逆使役として機能することを述べる。この結果を踏まえ、第4節では南アジア言語の使役の特徴や通言語的な逆使役の特徴に対する示唆について議論を展開する。第5節で本発表を結ぶ。

## 2. [主格主語 分詞 GO/FALL] 構文と BECOME 受身構文

本節では、[主格主語 分詞 GO/FALL] 構文と受身の相違点を明らかにするため、[主格主語 分詞 GO/FALL] 構文とベンガル語の代表的な受身構文である BECOME 受身構文を概観する。

### 2.1. [主格主語 分詞 GO/FALL] 構文

#### 2.1.1. [主格主語 分詞 GO/FALL] 構文の項構造

[主格主語 分詞 GO/FALL] 構文において、主語は主格で表され、分詞に続いて、主動詞である *ja* ‘go’ または *por* ‘fall’ が用いられる。(3) は他動詞構文、(4) と (5) は同じ動詞が分詞として用いられた [主格主語 分詞 GO/FALL] 構文である。他動詞構文の (3) で被動作主の目的語だった *fitā* ‘Sita’ が [主格主語 分詞 GO] 構文の (4) および [主格主語 分詞 FALL] 構文の (5) で主格の主語として現れる。(4) と (5) で動作主 *ram* ‘Ram’ は出現できない。

#### (3) 他動詞構文

[*ram*]<sub>A</sub> [*fitā-ke*]<sub>P</sub> *mar-l-o*  
 Ram.NOM Sita-DAT kill-PST-3  
 「ラームはシータを殺した / 殴った」

#### (4) [主格主語 分詞 GO] 構文

(\*[*ram dara*]<sub>A</sub>) [*fitā*]<sub>SP</sub> *mar-a* *gæ-l-o*  
 Ram by Sita.NOM kill-PTCP go-PST-3  
 「シータは死んだ」

#### (5) [主格主語 分詞 FALL] 構文

(\*[*ram dara*]<sub>A</sub>) [*fitā*]<sub>SP</sub> *mar-a* *por-l-o*  
 Ram by Sita.NOM kill-PTCP fall-PST-3  
 「シータは死んだ」

他動詞構文と [主格主語 分詞 GO/FALL] 構文の意味役割と文法関係を図示すると (6) と (7) のようになる。

#### (6) 他動詞構文

A                      P  
 |                      |  
 SBJ                    OBJ

#### (7) [主格主語 分詞 GO/FALL] 構文

S<sub>P</sub>  
 |  
 SBJ

### 2.1.2. [主格主語 分詞 GO/FALL] 構文における分詞の構成素

先行研究 (Chatterji 1926: 921; Bhattacharya 2006: 3) が述べる通り、分詞スロットに生起できる動詞には制限がある。上記の例で挙げた *mar* ‘kill’ の他に *dhər* ‘catch’、*cap* ‘press’、*bādh* ‘tie’、*ḍhak* ‘cover’ などが生起する。これらは皆、単音節の語幹を持つ他動詞である。複音節の語幹を持つ動詞 (*patha* ‘send’ や *ḍhoka* ‘put in’) や複雑述語は容認されない。複雑述語の例として、名詞と動詞から成る *mar de* (beating give) ‘beat’ や 複数の動詞から成る *mer-e phael* (kill-CP throw) ‘slay’ が挙げられる。

生起できる動詞のうち、*cap* ‘press’ や *ḍhak* ‘cover’ など一部は自他同形動詞であるため判断がつきにくいものの、他動詞 *mar* ‘kill’ ではなく自動詞 *mər* ‘die’ を分詞スロットに用いた以下の例が非文であることから、分詞スロットは他動詞に限定されるということが分かる。

- (8) \*[*ṭita*]<sub>SP</sub>      *mər-a*      *poṛ-l-o*  
Sita.NOM      die-PTCP      fall-PST-3  
Intended: 「シータは死んだ」

### 2.1.3. [主格主語 分詞 GO/FALL] 構文は複雑述語である

Thompson (2010, 2012) はこの構文を複合語と呼んでいるが、本稿はこれを複合語ではなく複雑述語と見なす。複合語と判断する一つの基準として Lieber and Štekauer (2011: 7) は複合語を形成する構成素の不可分性や構成素間の挿入不可性といった統語的な観点からの特徴を挙げる。この構文では分詞は省略されうる。また、とりたてて詞や否定辞など他の要素の挿入も許される。以下の [主格主語 分詞 FALL] 構文の例では否定辞 *na* が分詞と主動詞の間に挿入されている。

- (9) *amar*      *mrig-ṭi*      *jodi*      *ba*      *ṣompurno*      *dhər-a*      *na*      *poṛ-e*      ...  
1.SG.GEN      deer-CLF      if      EMPH      completely      catch-PTCP      NEG      fall-PRS.3  
「もしも私の鹿が完全に捕まらないのであれば...」      (Tagore<sup>1</sup>, *Potrālap*)

したがって、本構文を複合語と見なすのは妥当ではない。

複雑述語とは、一つの叙述に二つの概念が含まれる構文を指す (Croft 2022: 397)。研究者によって定義や含める範囲は微妙に異なるが、概ね複数の構成素が単一節を成すという点では共通の理解があると思われる。複雑述語の判断基準の一つとして、Croft (2022: 401–402) は単一の主張を持つことを挙げている。これは複数回否定できるかという観点でテストできる (Croft 2022: 402)。この構文の場合、以下のように、分詞と主動詞の各々を否定するために二度否定辞 *na* を挿入すると非文となる。

- (10) \**cor*      *pulif-er*      *kach-e*      *na*      *dhər-a*      *poṛ-l-o*      *na*  
thief      police-GEN      near-LOC      NEG      catch-PTCP      fall-PST-3      NEG

このように、一度しか否定できないので、この構文は複雑述語であると見なせる。

## 2.2. BECOME 受身構文

ベンガル語の受身構文には主動詞の別 (*ho* ‘become’ または *ja* ‘go’) で二種類の構文が認められるが、

<sup>1</sup> 例文のうち、Tagore と記載のあるものは、以下の Web サイトから得られた Rabindranath Tagore (詩人、作家) の口語体作品のデータを利用している。School of Cultural Texts and Records, Jadavpur University, 2023. *Bichitra: Bichitra Tagore Online Variorum*. Kolkata: School of Cultural Texts and Records, Jadavpur University. URL: <http://bichitra.jdvu.ac.in/index.php>, 最終アクセス日: 2023/05/02

本発表では主動詞が *ho* ‘become’ から成る代表的な受身構文を取り扱う。これを本発表では便宜上、BECOME 受身構文と呼ぶ。BECOME 受身構文は以下のように表現される。

- (11) *oſim-ke jɔkxon pita bol-e dak-a ho-l-o ...*  
 Asim-DAT REL father say-CP call-PTCP become-PST-3  
 「オシムが父親と呼ばれた時に…」 (Tagore, *Choto o boro*)

ベンガル語の BECOME 受身構文において、被動作主の格標示は他動詞構文における目的語の標示を持ち、動詞は常に 3 人称の活用になる。(11) で *oſim* ‘Asim’ は与格で標示されている。ベンガル語において有生や定の目的語は与格 *-ke* で標示されるが、上記の例もそれに従った表現となっている。

また、ベンガル語の BECOME 受身構文において動作主は表されないことが多いが (Klaiman 1981: 116)、表すとすれば「～によって」を意味する後置詞 *dara* を用いる後置詞句を用いるか、動作主を属格にする (Bhattacharya 2006: 3–4)。

- (12) *jon-er (dara) boi por-a ho-yech-e*  
 John-GEN by book read-PTCP become-PRF-3  
 「ジョンによって本が読まれた。」 (Bhattacharya 2006: 4)

ベンガル語の他動詞構文と BECOME 受身構文の意味役割と文法関係を図示するとそれぞれ (13) と (14) のようになる。

(13) 他動詞構文



(14) BECOME 受身構文



### 3. [主格主語 分詞 GO/FALL] 構文は受身ではなく逆使役である

通言語的に、受身は典型的に (a) 統語的な結合価が能動態のものより一つ少ない、(b) 主語は能動態の非主語の被動作主に相当する、(c) 周辺的で選択的な項が能動態の動作主主語に相当する、(d) 形式的に述部で複雑にコード化されるという特徴を持つ (Zúñiga & Kittilä 2019: 83)。

- (15) *boku wa taroo ni nagur-are-ta*  
 1.SG TOP taro by hit-PASS-PST (Shibatani 1985: 841)

上記の日本語の例では、「殴る」という他動詞構文における被動作主「僕」が主語で、動作主「太郎」が付加詞で表されており、統語的な結合価が減少している。また、動詞「殴る」に接尾辞 *-are* が付与され、動詞の形式は複雑になっている。

一方、逆使役は、(a) 意味的および統語的な結合価が基本の事象よりも一つ少ない、(b) 意味的にも統語的にも項構造から動作主は削除される、(c) 主語は非逆使役の被動作主に相当する、(d) 形式的に述部で複雑にコード化されるという特徴を持つ (Zúñiga & Kittilä 2019: 41)。

- (16) (\**dareka niyotte*) *kootei ni ookina maru ga kak-asat-te-ru*  
 someone by playground DAT big circle NOM draw-SP-GER.be-NONPST  
 (Sasaki 2016: 190)

上記の日本語北海道方言の例では、「書く」という他動詞構文における被動作主（主題）「大きな丸」が主語となり、動作主は表されず、統語的な結合価が減少している。また、動詞「書く」に接尾辞 *-asar* が付加し、動詞の形式は複雑になっている。Sasaki (2016) はこれを逆使役と分析している。

結合価が減少し、動作主ではなく被動作主が焦点化される点で受身と逆使役は類似している。実際に、この二つを共表現で表す言語もある。しかし、その一方で、受身と逆使役では相違する点もある。意味的な観点で、受身では事象に動作主が留まる一方で、逆使役では事象から動作主が完全に削除される。上記の日本語の例では、仮に (15) の例において動作主が表されていなかったとしても、殴るという行為において、ある動作主による被動作主への働きかけがあったことが含意される一方で、(16) の例では付加詞で動作主を表すことが不可能であり、事象からも動作主が削除されている。

2.1 節と 2.2 節で [主格主語 分詞 GO/FALL] 構文と BECOME 受身構文の形式を概観したが、これらの中には形式的な違いがある。前者は被動作主が主格主語で表され、動作主は現れない一方で、後者は被動作主が他動詞構文のように目的語としての標示で表され、動作主が現れる場合は付加詞で生起する。

表 1 ベンガル語の構文における意味役割と文法関係

	主語	目的語	付加詞
他動詞構文	動作主	被動作主	
BECOME 受身構文		被動作主	(動作主)
[主格主語 分詞 GO/FALL] 構文	被動作主		

形式的な違いに加え、意味の面でも違いが指摘できる。*mar* ‘kill’ と *por* ‘fall’ が述部を形成する場合、統語的に *mar* ‘kill’ の動作主を明示できないだけでなく、動作主は意味的に事象から削除される。つまりこの構文で表される事象に「殺す」動作主は存在しえず、「死ぬ」事象しか表現できない。

橋から飛び降りるという文脈において、以下の [主格主語 分詞 GO] 構文が *nijei* ‘by oneself’ と共起して自死であると解釈されることから、これは受身の事象ではないと判断できる。

- (17) *fe fetu theke jhāp di-ye nijei mar-a gae-l-o*  
 3.SG.NOM bridge from jump give-CP by.oneself kill-PTCP go-PST-3  
 「その人は橋から飛び降りて自ら死んだ」

その一方で、ベンガル語の受身構文である BECOME 受身構文では動作主を明示することが可能である。前述のように後置詞 *dara* を用いる後置詞句を用いるか、動作主を属格にすることで動作主を生起させることができる。

- (18) *amar dara bagh mar-a ho-l-o*  
 1.SG.GEN by tiger kill-PTCP become-PST-3  
 「私によって虎が殺された」 (Bhattacharya 2006: 4)

この場合、事象には動作主の存在が含意されており、「殺す」事象の動作主である「私」を導入することが可能となっている。仮に付加詞 *amar dara* 「私によって」が明示されていなくても事象に動作主が含

まれており、動作主による被動作主への働きかけがあることが含意されている。このことは [主格主語 分詞 GO/FALL] 構文の例と異なり、BECOME 受身構文では *nijei* ‘by oneself’ を伴い虎の自発性を意味することが不可能であることから示される。

(19) \**amar*    *dara* *bagh*        *nijei*        *mar-a*        *ho-l-o*  
           1.SG.GEN by    tiger        by.oneself kill-PTCP    become-PST-3

このように、BECOME 受身構文では動作主が事象に介入することが含意される。つまり意味的には動作主は削除されない。

[主格主語 分詞 GO/FALL] 構文において、有生動作主を示すことは不可能であるが、無生の原因を示すことは可能である。例えば、以下の [主格主語 分詞 FALL] 構文の例は「星が雲に覆われた」ことを表すが、星が覆われた原因である *megh* ‘cloud’ が所格 *-e* で標示されている。

(20) *tara*        *megh-e*        *dhak-a*        *por-l-o*  
       star        cloud-LOC        cover-PTCP    fall-PST-3  
       「星が雲に覆われた」

このような無生物の原因が表される構文を Zúñiga and Kittilä (2019: 43) は無生物原因構文と呼び、非典型的な逆使役構文として位置付けている。

同じ事象を BECOME 受身構文で表すと以下のようなになる。

(21) ??*tara*        *megh-e*        *dhak-a*        *ho-l-o*  
       star        cloud-LOC        cover-PTCP    become-PST-3  
       「星が雲に覆われた」

*dhak* ‘cover’ を用いたこの二つの構文は、*mar* ‘hit, kill’ の場合と同様に、事象における動作主の存在という点で大きく意味が異なる。他動詞構文の「雲が星を覆う」という事象には通常、有生の動作主の存在は想定されていない。神話やファンタジーでしか恐らく有生の動作主が雲を動かすことはできない。BECOME 受身構文は事象に動作主を含むので、BECOME 受身構文で表される (21) は雲を動かすことのできる有生の動作主が存在するかのような含意が生まれてしまう。その一方、[主格主語 分詞 FALL] 構文の (20) は逆使役構文として事象から動作主が削除されているので、「星が雲に覆われる」という自然現象を捉えた表現となっている。

以上より、意味的および統語的な観点から動作主が事象に存在するか否かという観点で、[主格主語 分詞 GO/FALL] 構文は受身構文とは異なり、逆使役と分析できることを主張する。

#### 4. 議論

Masica (1976) は言語連合として南アジアを特徴づける上で、使役動詞をその観点の一つとして取り上げた。実際に、使役交替において、南アジアの言語では使役化が中心的である。Haspelmath (1993) を基にして作成された「使役交替言語地図」(国立国語研究所 2014) によると、31 の動詞対のうち、例えばヒンディー語では 72% が、ボージプリー語では 83.9% が使役化する (Nishioka 2014; Prakash & Raj 2020)。本発表はベンガル語の [主格主語 分詞 GO/FALL] 構文に着目し、記述をすることで、ベンガル語に逆使役があることを提示した。使役化が優勢とされる南アジア言語において逆使役構文が存在するということは、共通点を多く持つと考えられている言語連合内にもより多くの点で多様性があることを示唆す

る。

通言語的に、逆使役構文は受身構文と共表現を成すことが多いと報告されている (Keenan & Dryer 2007 など)。ベンガル語では格標示の点で厳密には受身構文と共表現を成さないものの、分詞と主動詞から成る構文により結合価の減少が起こるという点は受身構文も逆使役構文も共通している。このことは、態に関わる文法がこの構文を適用する傾向があることを示唆しており、構文研究によりベンガル語文法の体系が明らかになると考える。

また、通言語的に、逆使役構文は動詞接尾辞などの形態論的な操作により表されることが多い (Zúñiga & Kittilä 2019: 48)。統語的な逆使役構文は存在するものの、報告されているデータは限定的である。その点で、ベンガル語における統語的な構文の存在は逆使役構文の多様性を示唆する。

## 5. 結論

本発表は [主格主語 分詞 GO/FALL] 構文を複雑述語であると分析した上で、事象における動作主の有無という観点から意味のおよび統語的な振る舞いを記述し、この構文は逆使役であることを示した。本発表は、南アジアの言語に逆使役が存在することを示し、言語類型論における逆使役構文の多様性を示唆するデータを提供した。

**略号一覧** 1: 1<sup>st</sup> person, 3: 3<sup>rd</sup> person, CLF: classifier, CP: conjunctive participle, DAT: dative, EMPH: emphasis, GEN: genitive, GER: gerundive, HON: honorific, LOC: locative, NEG: negative, NONPST: nonpast, NOM: nominative, PASS: passive, PRF: perfect, PRS: present, PST: past, PTCP: participle, REL: relative, SG: single, SP: spontaneous, TOP: topic

### 参考文献

- Bhattacharya, Tanmoy. 2006. “Butterpillar or caterfly? The Bangla passive in a minimalist parser”. In *Proceedings of the 1st National Symposium on Modeling and Shallow Parsing of Indian Languages*, 1–13. Mumbai: IIT.
- Chatterji, Suniti Kumar. 1926. *The origin and development of the Bengali language*, Part II. Calcutta: Calcutta University Press.
- Croft, William. 2022. *Morphosyntax: Constructions of the World’s Languages*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Haspelmath, Martin. 1993. “More on the typology of inchoative/causative verb alternations”. In Bernard Comrie & Maria Polinsky (eds.), *Causatives and transitivity*, 87–120. Amsterdam: John Benjamins.
- Keenan, Edward L. & Matthew S. Dryer. 2007. “Passive in the world’s languages”. In Timothy Shopen (ed.), *Language Typology and Syntactic Description*, 325–361. 2nd edn. Cambridge University Press.
- Klaiman, Miriam. H. 1981. “Bengali Passives: Semantics above the Word Level”. *Papers from the Regional Meetings, Chicago Linguistic Society 17*. 116–124.
- Lieber, Rochelle & Pavol Štekauer. 2011. “Introduction: Status and Definition of Compounding”. In Rochelle Lieber & Pavol Štekauer (eds.), *The Oxford Handbook of Compounding*. Oxford: Oxford University Press.
- Masica, Colin P. 1976. *Defining a Linguistic Area: South Asia*. Chicago: Orient Blackswan.
- Sasaki, Kan. 2016. “Anticausativization in the northern dialects of Japanese”. In Taro Kageyama & Wesley M. Jacobsen (eds.), *Transitivity and valency alternations*, 183–214. Berlin: De Gruyter Mouton.
- Seely, Clinton B. 2011. *Intermediate Bangla*. München: LINCOM Europa.
- Shibatani, Masayoshi. 1985. “Passives and Related Constructions: A Prototype Analysis”. *Language*, 61(4). 821–848.
- Thompson, Hanne-Ruth. 2010. *Bengali: A comprehensive grammar*. London: Routledge.
- Thompson, Hanne-Ruth. 2012. *Bengali*. Amsterdam: John Benjamins.
- Zúñiga, Fernando & Seppo Kittilä. 2019. *Grammatical Voice*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 国立国語研究所. 2014. 『使役交替言語地図』 (<https://watp.ninjal.ac.jp>).

### 参照データ

- Nishioka, Miki. 2014. Transitivity pairs in Hindi. *The World Atlas of Transitivity Pairs*. Tokyo: National Institute of Japanese Language and Linguistics. (Available online at: <http://watp.ninjal.ac.jp>).
- Prakash, Om & Riya Raj. 2020. Transitivity pairs in Bhojpuri. *The World Atlas of Transitivity Pairs*. Tokyo: National Institute of Japanese Language and Linguistics. (Available online at: <http://watp.ninjal.ac.jp>).